

岸岱筆高井鴻山宛書簡（早稲田大学図書館蔵）

翻刻と解題

藤原幹大（美学美術史学専門／博士課程後期課程）

一、はじめに

本稿では、江戸時代後期の画家・岸岱（一七八二～一八六五）が、小布施の素封家で文化人としても知られる高井鴻山（一八〇六～一八八三）に送った書簡（早稲田大学図書館蔵）の内容について、翻刻と解題を行う。本書簡は南大曹旧蔵名家書翰集の一部で、現在は卷子装となっている。法量は一八×一七七^五で、巻頭には「岸岸岱」と記された桃色の題簽が貼られる。画像データが「早稲田大学古典籍総合データベース」にてウェブ上で閲覧可能で、筆者もこれによった。本文中には画家と注文主との協議の経過が示され、本画における図像の決定過程をうかがえる一資料として、また研究が途上状態にある岸派の画家について問題を提起するものとして、ここに紹介する。

二、岸岱および高井鴻山の人物像

書簡の内容を確認する前に、岸岱と高井鴻山の人物像に関して整理しておきたい。

岸岱は、江戸中～後期の京で活動した画家・岸駒（一七四九または一七五六～一八三八）の長男で、名は国章のちに岱と名乗る。父・駒の用いた肥瘦のある線描を受け継ぐと同時に、当時流行していた四条派風の瀟洒な画風を取り入れ、十九世紀以降、岸派が一大画派となる基盤を形成した^一。当時の人名録や画家番付からは、四条派の祖・呉春（一七五二～一八一二）亡きあとの京において、画壇の長として確固たる地位を築いていたことが知られる^二。実際に、安政二年（一八五五）の御所障壁画制作に際しては「諸大夫の間」を担当するが、そのうち最高位の人物の控え間である「公卿の間」を描いたのは岸岱であり、岸派が当時充実期にあったことがうかがえる^三。なお、彼は有栖川宮家に仕える地下人で、『地下家伝』^四によると文化五年（一八〇八）十二月十九日に従六位下筑前介に、のち嘉永六年（一八五三）六月十一日には従五位下越前守に叙任されている。これについては、書簡の出された時期に関する手がかりとなり得るため、後述する鴻山の活動と併せて判断したい。

一方、高井鴻山は信州小布施の豪農商で、佐久間象山や葛飾北斎（一七六〇～一八四九）との交遊でも知られる人物である。なお本姓は市村で、貧民救済を行った祖父・作左衛門の代に高井姓を名乗ることを許された。鴻山も祖父同様、天保の飢饉に際して倉を開放し、多くの村民を救ったことから、長野県小布施町では現在に至るまで顕彰が盛んである^五。この他にも私塾を開く、尊王攘夷論・公武合体論を唱え国事に奔走するなど、様々な功績や著名人との交流によって、郷土を象徴する人物として愛されている。ちなみに書画を含む関係資料の多くは現在、同地の高井鴻山記念館に収蔵され、その事績を辿ることが可能である。また

鴻山の蔵書に関しては、小布施町立図書館まちとしよテラソにおいて鴻山文庫として保存され、近年その全容が公刊されるなど、美術史的観点に留まらない研究が進められつつある^六。

書状内にみえる岸岱、およびその父・岸駒とは文政三年（一八二〇）、京への遊学の際に知り合ったと思わしい。現存する鴻山の花鳥画においては、岸派の特徴を引き継ぐ作品も見受けられ、彼らに画を学んだとの伝承を裏付けている。小布施に戻ったのちも岸家との交流は継続し、同地には現在も岸派の作品が伝わる。岩佐伸一氏の報告によると、鴻山の手控えである『重修堂主人手控帖』には「いつ、いくらで、どのような作品を入手し、どこへ頒けたか」が記され、岸岱の作品も五〇件ほど確認できるといふ。岸岱作品の購入に関する記述がみられる本書簡の関連が期待されるが、本稿執筆までに調査を実施できなかったため、書簡の内容と双方の活動履歴から、書かれた時期を検討する。

まず岸岱が「筑前介」を名乗った期間から、下限は嘉永六年（一八五三）に設定できる。くわえて鴻山は文政十年（一八二七）～天保元年（一八三〇）まで再び京へ、天保四年（一八三三）～天保七年（一八三六）秋まで江戸へ遊学しているため、左記の期間のいずれかに絞り込める。

- ① 天保元年に京から戻り、同四年に江戸へ遊学するまでの間。
- ② 小布施へ戻った天保七年以降～嘉永六年までの間。

さらに、岸岱が牛を描いた扇面画を贈っていることから、この年の干

支は丑であった可能性が高い。干支を考慮した場合、天保十二年（一八四一）と嘉永六年（一八五三）の二つが該当するが、このうち前者は、前年の九月に鴻山の父・熊太郎が没しているため、書簡の冒頭で新春の挨拶を述べている点にそぐわないように思われる。したがって、本書簡は嘉永六年の二月十三日に書かれたと考えられる。

また、この書簡の特徴として、まずもって目に付くのは料紙の美しさであろう。陰暦二月らしく桜が摺られ、ハイライトを用いた花卉の表現も確認できる。文中の岸岱の言からは、鴻山を非常に気遣う様子が読み取れるが、こうした料紙の装飾からも彼の細やかな心遣いが看取される。

三、書簡の内容

書簡の内容は次の四件に大別される。

一件目は、絹本の画の潤筆料の他に、「交張」用の作品の代金を受け取り、対応するそれらの作品を送った報告である。続けて、画絹代の支払いを申し出る鴻山に対して辞退の意思を示していることが分かる。次に二件目は、「虎図屏風」の礼金と共に、料紙の代金を送金したことへの礼となっている。三件目では、李商隱の漢詩を絵画化するにあたり、鴻山による詩中の語の解釈について私見を述べている。四件目は、伏見人形の一文牛を描いた扇絵を送ったことを述べ、内容を締めくくっている。四件目の内容については以下、個別に検討する。

(い) 絹本の画の儀

ここでは絹本の「梅に双鶴図」に金一両の潤筆料が、紙本の「交張」

用の作品五枚に金一疋の謝金が支払われ、それらに対応する作品を送つたと報告している。また「梅に双鶴図」については、鴻山から提案された絹代の支払いを辞退している。

問題となるのは「交張」の語であるが、これは張交、すなわち「貼交」と同義として解釈できる^八。すなわち、貼交屏風に用いる小型の作品の注文に応えたものと理解される。十八世紀末から徐々に、富裕な町人による書画収集が盛んになり、収集した作品を書画帖や貼交屏風に仕立てた作例が増え始める点は多くの研究が指摘するところ^九で、本書簡にみえる紙本の作品もそうした依頼に基づくと考ええる。

なお、高井鴻山記念館に問い合わせたところ、館長の金田功子氏より「梅に鶴図」の掛幅が現在同地に遺ることをご教示頂いた。書簡中の作品に相当する可能性があり、関連が注目される。

(ろ) 虎図屏風

昨年の冬に依頼された虎図屏風について、金五両の謝金にくわえ紙代の金一方、すなわち一分金を拝領したこと、またそのことへの謝意を示している。(い)の件で絹代の受け取りを辞退している理由には、虎図屏風の件で同様の心遣いを受けたことからの遠慮もあったと考えられる。

(は) 李商隱の漢詩

書簡全体でこの一件に関する内容が最も長く、岸岱も鴻山の意見を聞きたいと繰り返し述べていることから、本書簡の中心的な話題であることが分かる。また、当時の絵画の価格や、制作事情を窺い知ることがで

きる点で非常に興味深い。文章後半に名が挙がる「舛屋次郎助」については岸派関係の資料からその名を見出せなかったため、当時の人名録や地誌を再度確認したい。

「羸を取る」の意が難解だが、諸橋轍次『大漢和辞典』巻十(大修館書店、一九五九年)より「羸」の項を見ると「あまる。あまり。」との解説がみえる。ここから「余計なもの」として捉え、前後の文で非常にかしこまった様子がうかがえることから、「余計なことを言う」程度の意と考えられる。

ここでは岸岱が鴻山から、李商隱の漢詩「錦瑟」^{一〇}を描いた画を望まれ、その絵画化にあたって詩の解釈について鴻山と意見を交わしている。同詩は『三体詩』に採られており^二、認知度の高い漢詩であったと推察されるが、画題として取り上げる作例は岸岱に限らず、現段階で把握していない。しかしながら、清・席啓寓『唐詩百名家全集』(康熙四十七年(一七〇二)序刊)所収の『李商隱詩集』や、清代の注釈書である『李義山詩集箋注』^三では巻頭に掲載されており、伝統的に李商隱詩の名編として扱われていたことは確かである^三。

この書簡に先立ち、鴻山は「珠」と「玉」の区別が詩中においてなされている可能性を指摘したとみられ、岸岱はそれに対し、まず両者の区別はないとし、続けて持論を展開する。それによれば、「月明らかにして珠涙有り」とは海上に映る月のたとえで、「藍田日暖かにして玉煙を生ず」は、藍田山に太陽が昇り、その際に生じた陽炎を煙に見立てたもの、と述べている。すなわち、玉と珠は比喻であり、それらの言葉がそれぞれ指す内容は異なるが、文字としての区別はなされていない、という解

積となる。

また、一幅で描くと繁雑になってしまうため、双幅で制作することを伝えたのち、気に入らなければ返却して構わないと、繰り返し鴻山を氣遣う文言がみられることから、鴻山は当初、一幅で描くよう求めた可能性が考えられる。さらに、念入りに鴻山の意をうかがう様子からは、岸岱が画の師匠としての立場から持論を押し通すのではなく、鴻山の意に適うかを最優先し、鴻山の考えを尊重する態度が認められる。

ここで疑問として浮かび上がるのは、なぜ鴻山が岸岱に詩文の絵画化を依頼し、くわえて詩文の解釈について質問しているのかという問題である。このことを説明する手がかりとして、岸岱が一定以上の教養を備えていたことを示唆する伝承や記録が存在する点が指摘できる。

たとえば、京の人名録である『平安人物志』には文化十年版以降「画家」の項に列挙されているが、文政十三年版以降は「文雅」の項にも同時に名を連ねている^{一四}。この項には他に、『絵本通俗三国志』などで知られる読本作者・池田東籬（一七八八〜一八五七）や、町奉行の与力でありながら諸分野の学芸に通じ、陵墓研究で功績を残した平塚飄斎（一七九四〜一八七五）、香川景樹門下の歌人だが医学も学び、種痘を奨励した足田千益（一七九三〜一八六九）など、複数の分野で横断的に活動した人物の名がみえる^{一五}。岸岱が著述活動に関わった形跡は、文政十三年刊の小島涛山（著）・東隴庵（増補）『地震考』において、序文を記すことが確認されるのみで、画家以外としての活動には不明な点が多い。しかしながら、当時の人々が彼を「画家」に留まらない人物と見做していたことが看取される^{一六}。

なお、流派内の活動ではあるが、岸岱はしばしば自画賛や岸駒画への着賛を行っており^{一七}、こうした行跡をもって「同派の中で最も文筆に優れた人物」なる認識が生まれたとも推察できる。さらに、父・岸駒に関してはその当時、書家としての認識がなされていた可能性がある。文政十三年版『平安人物志』^{一八}の「書」の項には「岸天開〔再出／在中卷〕^{一九}」なる人物が掲出されているが、この人物こそ天開翁の号を持ち、中巻の「画」の部にその名がみえる岸駒ではないだろうか。妥当性については今後、文献資料からの精査を要するが、岸岱の文筆家的側面を説明する端緒となり得る情報として、ここに挙げておく。

また、岸岱による詩文の解釈は、何らかの注釈書に基づくものではなく、彼自身の考えによるものと思われる。たとえば明応三年（一四九四）刊で江戸期にも覆刻された『増註唐賢絶句三体詩法 卷之二』では、「滄海月明珠有淚」は中秋の頃にできる真珠として、「藍田日暖玉生煙」は戴容州の詩の一節で、藍田山から産出される玉が陽光を反射し、煙を上げるように照り輝く様子として解説されており^{二〇}、いずれも岸岱の解釈とは異なる。

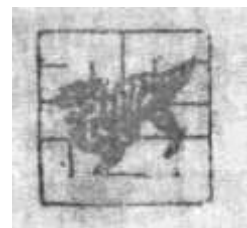
この一件に関して非常に興味深い点は、詩の絵画化の際、岸岱と鴻山が細かな語の解釈を重視している点である。一般に、文学や故事に基づく画題は図像として定型化しやすく、先行図像を元にして描かれることが多い。だが、岸岱と鴻山は詩情を表出するにあたり、自らの解釈を元にして図像を作り出そうとしている。こうした態度が当時一般的であったかは、さらなる検討を必要とするものの、詩意の表出を重視する客層と、それに応える画家が存在したことは注目に値する。

なお、本件の末尾には「注に云」として、作品の裏打の依頼に関する話題が付け加えられる。文中の「惣グマ」は「総隈」を指し、完成品として良いと判断したため、このままの状態で送ることを伝えている。

(に) 一文牛の扇絵

手紙の最後では、商談と教養的な話題が続いたのを和らげる意味もあつてか、岸岱の描いた扇絵について簡単に述べている。それによると、伏見人形の一種である一文牛を描いたもので、落款にも一文牛の図様をあしらったとのことである^三。一文牛は子供の疱瘡除けとして親しまれた玩具であり、扇絵は新年の祝賀と同時に、一家の健康を祈念して贈ったものと解釈できる。現存は定かでないが、戯れにという文言から淡彩ないし墨画で略筆的に描いた、素朴で瀟洒な画が連想される。「御専笑くださるべく候」という岸岱の言通り、扇を受け取った鴻山も愛らしさに笑みをこぼしたのだろうか、と想像させられる一節である。なお、一文牛の印章を用いた作例は見当たらなかったが、それに類するものとして、虎と思わしき動物が彫られた印章が、岸岱の作品から確認できる(図一)。

一 岸派の画家については主に以下の書を参考にした。『岸駒 没後一五〇年記念



(図一) 岸岱使用印章

四、おわりに

本書簡の内容は、江戸後期における中国文学主題の絵画と、その画題の典拠となる文学との関連性を考察する上で、興味深い資料を供している。「錦瑟図」については今後、『重修堂主人手控帖』や小布施に伝来する作品の調査を通じて検討していく予定であるが、高井家所蔵の書画の多くは明治期に他家の手へ渡り、高井鴻山記念館に収蔵される岸派の画は限られている^三。したがって同作品の搜索は困難であることが予想されるため、「錦瑟図」を含む、包括的かつ長期的な同地の岸派作品調査とともに、他の中国故事・文学主題による岸岱作品の考察を個別に進め、集積する必要がある。

十九世紀の京で活躍した画家たちは従来、有象無象の画家群として軽んじられてきたきらいがあり、近年ようやく研究の基盤が作られつつある。岸派の画家についても例外でなく、伝記・文書資料は四条派などの他派の画家より豊富なものの、創始者の岸駒ですら、生没年や作風の変化をはじめ多くの課題が残されている。本書簡の内容を現存作品と併せて再検討することで、岸岱の画家としての新たな一側面を明らかにしていきたい。

特別展『富山美術館、一九八七年。『岸派とその系譜 岸駒から岸竹堂へ』

- 栗東歴史民俗博物館、一九九六年。『京都画壇 岸派の展開』敦賀市立博物館、二〇〇五年。
- 二 安政三年（一八五六）に記された『平安画家評判記』において、岸岱は番付の筆頭に数えられている（田島達也『平安画家評判記』について『美術京都』四十三号、二〇一二年）。
- 三 原田平作「岸岱筆 虎 解説」 徳川義寛・井上靖（監）『皇室の至宝 六御物 障屏・調度』毎日新聞社、一九九二年、二一九頁。
- 四 正宗敦夫（編）『地下家伝』自治日報社、一九六八年。
- 五 『高井鴻山 北斎を小布施につれてきた男』小布施町教育委員会、一九九一年。
- 六 「小布施町立図書館鴻山文庫分類目録」『斯道文庫論集』四十八号、二〇一三年。
- 七 岩佐伸一「岸派の形成と継承に関する研究」『鹿島美術研究年報十七号別冊』二〇〇〇年。
- 八 『日本国語大辞典』第十八卷（小学館、一九七五年）には「いろいろな書画または布地などをまげて張りつけること。また、その張りつけたもの。はりまぜ。」とある。
- 九 横谷賢一郎「東山第一楼勝会書画帖と寛政く文化年間の京都画壇」『大津市歴史博物館研究紀要』第五号、大津市歴史博物館、一九九七年。
- 一〇 久富哲雄（編）『影印仮名つき錦繡段・三體詩・古文真寶』（クレス出版、一九九二年）より全文を記す。
- 李商隱「錦瑟」
- 「錦瑟無端五十弦 一弦一柱思華年
 莊生曉夢迷蝴蝶 望帝春心託杜鵑
 滄海月明珠有淚 藍田日暖玉生煙
 此情可待成追憶 只是當時已惘然」
- 二 註一〇参考文献所収の天和二年（一六八二）版、元禄八年（一六九五）版を参照した。
- 二二 早稲田大学図書館本の乾隆十一年（一七四六）刊『重訂李義山詩集箋注 卷之上』を、同図書館の古典籍総合データベースより参照した。
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko17/bunko17_w0111/index.html
 二〇一五年十二月二十三日閲覧。

- 三 『李商隱詩集』に関する指摘は川合康三氏による。くわえて川合氏は、詩中の「藍田日暖かにして」の句が溶け込んだ無名氏の詩句が『太平記』に挿入されていることを、国内における同詩の受容の例として示されている。同氏選訳『李商隱詩選』岩波書店、二〇〇八年。
- 四 森銃三・中島理寿（編）『近世人名録集成 第一巻』勉誠社、一九七六年。
- 五 なお、同書における「文雅」の項の掲出基準については、さらに検討を重ねていきたい。
- 六 『東洋美術大観』第六冊（審美書院、一九〇九年）では、岸岱の養子・連山の実子にあたる岸九岳の談として、岸岱は岸駒に学問を叩き込まれ、一族で最も文筆に優れた人物となったとの話が紹介されている。
- 七 自画賛の例としては、文久三年（一八六三）の作で、旧作の漢詩を添えた「猛虎図」が『思文閣墨蹟資料目録 和の美』四九二号（思文閣、二〇一五年）にて紹介されている。また岸駒画への着賛については、富山県南砺市の宇佐八幡宮に岸駒画、岸岱賛の虎図が伝わることが報告される。小久保啓一「岸駒の金沢時代と上洛直後」『岸矩から岸駒へ』富山市佐藤記念美術館、二〇一〇年。
- 八 註一四参考文献参照。
- 九 割書は「」で示した。また割書内の改行は／で示した。
- 一〇 早稲田大学図書館本を、同図書館の古典籍総合データベースより参照した。以下に該当部分を抜粋する。
- 「清也 海賈云 中秋有月 則是歲多珠而円
 和也 戴容州曰 詩家景 如藍田日暖良玉生烟」
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/hel8/hel18_01838/index.html
 二〇一五年十二月二十三日閲覧。
- 二一 一文牛に関しては以下の文献を参照した。有坂与太郎『伏見人形』画報社、一九二九年。尾崎清次『育児上の縁喜に関する玩具図譜』第一巻、笠原小児保健研究所、一九三一年。
- 二二 この件にくわえ、同館に「錦瑟図」に相当する作品が確認できないことについて、館長の金田氏より口頭にてご教示頂いた。
- なお、図一の図版は註一参考文献『岸派とその系譜 岸駒から岸竹堂へ』より掲出した。

【凡例】

- 1、漢字は原則として通行の字体に改めた。
- 2、読みやすさのため本文中には適宜、句読点を加えた。
- 3、改行の位置、段落空けは原本に従った。
- 4、書簡の画像は早稲田大学図書館の許可を得、同館の古典籍総合データベースよりダウンロードしたものを末尾に掲載した。
- 5、翻刻および解題にあたっては本学教授 塩村耕先生のご指導を賜った。

華翰辱拜見。如来教、万国一般新禧申納候。先以挙家御清栄御起居可被成奉賀候。弊廬無事致消光候。乍慮外御休意可被下候。随而此度絹本之画之儀御申越、具ニ承候。右ニ付為潤筆金一円、外ニ交張用之為謝金百疋蒙恵、辱拜受仕候。則尺三寸ニ梅双鶴一張、唐帟交張物五枚、致揮写候。差出候。御入手可被下候。絹代之儀被仰越候。五十疋位之事ニ候故、如何様共不苦候也。

一、旧冬ハ帟之屏風画
差下候ニ付為御謝儀金五円、
外ニ紙料金一方御恵投
被下、辱正ニ致落手候。奉多謝候。
一、李商隱之詩意之画之儀
御申越、是又承候。如諭之
事ニ而人情不免之処ニ御座候。

莊生曉夢ハ宜

望帝春心も宜

滄海月明珠有淚

藍田日暖玉生煙

此後對之處、珠玉之差別

可有之哉と御申越、御尤ニ御座候。

然處、珠玉之差別ハ無之

事ニ被存候。段々愚考も

致候處、御存之通り、珠玉ニ

淚煙ハ無之事、珠玉ハ

同形之事、依之愚考ニハ、

海上ニ月明、其月ヲ珠ニ

譬諭致候事ニ而、自ラ水氣ヲ

含候處、藍田日光、其日ヲ

玉ニ比し、陽炎之躰ヲ

煙ニ見立候事と奉存候

左候得ハ、一幅中ニハ難認候

事故、双幅ニ致候。定而

貴方ニハ御論も可有之事と

遠察仕候得共、譬諭之事ハ

凶面ニ而ハ混雜之事ニ相成候

尤、余の碩学之人も討論

致候事御座候。是等も譬諭之

處ニ心付不申候趣ニ相成り、老拙

聊贏ヲ取候事ニ御座候。

尤貴意ニ不適候ハ、無御遠慮

御返し可被下候。

注ニ云、此度裏打申付候得ハ

宜候得共、御賞誉ニ預り候

惣グマ故、此俛差出候。

先ハ右之段得貴意

度、頃日舛屋次郎助

出途申來ニ付、匆卒

呈一書候。吳々も右詩意

之處、無御遠慮御返候而も

不苦候。又々御高論も御座候ハ、

拝聽希候。

一、当春戲ニ認候扇子一握

呈上仕候。御存も御座候哉、洛南

伏見街道ニ土偶類ヲ

鬻候家ニ一文牛ト唱候、

如凶泥牛御座候。夫ヲ

認メ、落款中当年

大小認候事無遍大ニ

御座候御專笑可被下候先ハ

右等得貴意度、早々頓首

天香：孤燈照一室
 交尾而身在法指身
 口入之
 一曰至二年之居
 仙柳之一日
 一古南德
 一曰北文弟
 人生夜夢
 定帝喜如
 信海力
 夢回
 此信弟
 至不
 海
 後

人生夜夢
 定帝喜如
 信海力
 夢回
 此信弟
 至不
 海
 後

